「Charles Lambの日本研究者の足跡について」

加　藤　憲　明

（Ⅰ）「はじめに」

昨年（2014年）相次いで、チャールズ・ラムの『完訳　エリア随筆Ⅰ　正編（上)』（５月)、『完訳　エリア随筆　Ⅱ　正編（下)』（８月）が87年ぶりに国書刊行会から出版された。その後続編Ⅲ、Ⅳの上下巻が刊行の予定である。全53編の完訳の運びである。作家の南條竹則訳、立教大学教授藤巻明註釈である。南條氏は、「いくら怖い物知らずの私でも、エリア氏の長文癖と典故のおびただしさを考えると、とても手を出す気にはなれない。即座にお断わりした」[1)] と「あとがき」に書いている。ほんとに久しぶりのラムの平田禿木訳に次ぐ2度目の全訳である。作家と学者の組み合わせの業績としては、今年（2015年）５月に出版されたプルーストの『失われた時を求めて　全一冊』（角田光代・芳川泰久編訳新潮社）と同じである。ラムにしても、プルーストにしても難解な名作の翻訳が世に出るのは、現在の時点での解釈を見ることにおいてとても貴重な収穫である。「小説であれ、絵画であれ、長く残っているものには、ぜったいに理由があると私は思っている。善し悪しではない。人が手放すわけにはいかない理由がその作品にはぜったいにある。そしてその理由とは、何十年、何百年たとうとも、変形せず色あせもしない。私たちの暮らしがいかに変わっても、ぴたりと寄り添い続ける。それはすぐれているか否かという人の判断より、もっと人に肉薄した何かのはずだ。」[2)] と言う角田さんの言葉は、どの名作品にも通じるはずである。

ラムの『エリア随筆』は、「難解である、背景的な知識がないと理解不可能である、含蓄があり、年齢をとらないと分からない」などと様々なことが言われてきた。40年前、私が学部の学生の頃のいわば常識であった。ラムを研究対象に選ぶのは、趣味であるとさえ言われた。確かに文章が難しいと言えば、難しい。現代の易しい英文とは、かけ離れた存在であることは、事実である。今でも読むことが可能である夏目漱石の作品よりは、森鴎外の『渋江抽斎』を読むのにむしろ近いかもしれない。どんなに名作でも研究者だけが読めばよいとか、一部の趣味人が読めばよいではだめである。その作品がより多くの人が読む、読める作品になるのが望ましい。後に続く研究者、一般読者にとって、先人の翻訳、評論の存在は、ありがたく、計り知れない助けになる。

ラムの研究にこれまで貢献した日本人研究者の足跡を尋ねてみたい。翻訳、評論、研究書、註釈書などをとりあげてみたい。

（Ⅱ）「翻訳」

まずは、何といってもラムと言えば、大御所の平田禿木（本名喜一）（1873年~1943年）である。東京高等師範学校英語専修科出身である。1903年（明治36年）から３年間、文部省留学生としてOxfordに留学し、その後母校、女子学習院、明治大学などで英語を教えていた。41歳頃から、翻訳に専念し、数々の英文学の重要な作品の翻訳を国民文庫刊行会から出版している。

1929年に国民文庫刊行会から世界名作大観、英国編第15,16巻シリーズとして『エリア随筆集』上巻、下巻全訳が出版された。その「巻頭に」において、禿木は「ましてこのラムのやうなものになつては、一讀しただけではなかなか以って歯が立たず、再三繰返し味讀して漸くその意を了し、（中略）文芸批評に属するものこそ、實に難物中の難物であって、それにはもう散々に悩まされたのでした。（中略）翻譯に要する骨折は、全く原作者のそれに正比例するやうである。彼がその創出に多くの時と努力を費してゐればゐる程、その譯にも亦、それだけの時と努力を要するやうである。」[3] と翻訳の苦労と真髄を述べている。

禿木訳では、一冊の本の中に英語の原文と日本語訳文が別々に印刷されている。翻訳を読み、原文を確かめることができる利便性がある。私の手元にあるものは、何故か非売品になっている。

戸川秋骨（1871年~1939年）は、岩波文庫から昭和15年９月に『エリア随筆』を出版している。本名は、明治３年に生まれたから、「明三」とつけられたと言う。「序」の中で、秋骨の長女エマさんが、「この翻譯が完成して、原稿を岩波書店に渡して間もなく、父は病気になってしまいまひした。（中略）そして夏が来た時、父はたのしみにしてゐた旅行のために作った服に一度も手を通さず亡くなってしまったのでした。」[4] と書いている。秋骨は、残念ながら翻訳の出版を見ることなく亡くなったのである。「譯者の言葉」で、秋骨は、「文學はそれを筆にした人のあらわれに相違ないが、特にラムに於いては、エッセイズがその人物の化現である。（中略）何處までがラムの本音で、何處からがうそなのであるか、本気で言ってゐるのであるか、冗談を言ってゐるのであるか、わからない。（中略）全體が一種の象牙細工のやうな趣を成している。（中略）特にラムに於いては、全然気分情調をもつて讀ませ、周囲の空気とでもいふか、薫りといふか、さうしたものを以つて、人を魅するところに、その文學が成り立っている。」[5] と述べている。秋骨訳は、禿木訳よりもずっと読みやすい。一読して内容が頭に入ってくる。その点で、一般に読まれ

たのではないかと思う。「一種の象牙細工のやうな趣」という表現は特に有名である。岩波文庫は現在も版を重ねている。私は、ラムの原文とこの訳本を繰り返し読み、禿木の註釈を併用した。

石田憲次（1890年～1979年）譯『続エリア随筆集』新月社英米名著叢書（昭和24年2月再販発行）「あとがき」で、石田氏は「英國で中流の下の階級－lower middle class－といふがラムの文學は正にその階級の文學である。後にディケンズやギッシングの得意の境地とされたあれである。（中略）如何にもラムの文體は技巧の勝ったものである。それはちやうど我が謡曲や俳文などと同じで、引用や言ひかけが多く、錦繡を綴り合わせたやうである。それに頓呼、倒置などの修辞法が盛に用ひられて、散文でありながら、誌、韻文に近づいてゐる。（中略）その特異なる文體を全く趣の違った我が國の文に移さうといふのだからむつかしい。（中略）それを敢えてしたのは、ラムを愛し、自分の喜びを我が邦人に頒ちたいと言う多年胸に秘めて来た大野望の結果に外ならない。」[6)] と述べている。

筑摩書房世界人生論全集６（昭和38年、1963年7月）の中に、平井正穂氏（1911年～2005年）の『エリア随筆（抄）』があり、11篇の随筆の翻訳が納められている。その後、1978年11月に八潮出版から単行本の形で出版されている。ほぼ同じ内容のものである。筑摩版の解説「生活の知恵」は秀逸である。目から鱗が落ちる如くである。「人生において年齢を加えてゆくことはいわば幻滅感の累積だと私は思う。しかし、それらの幻滅感を切実に感じしかもなおなんらかの形であるヴィジョンへの地味ないとなみの連続の中にある種の平安を求めかつそれを感じることが、人間のある一つの知恵というものであろうと思う。（中略）彼（ラム）の題材は直接間接に自分に関係したものであり、ある意味では「私小説」的な趣をそなえている。エリアという仮面の背後にかくれてラムという人間が自分のことをさまざまな修飾をほどこしつつ語っている。（中略）いわば身辺雑記風人間と人間との出逢い、その間の微笑を誘うようなほろりとさせるような微妙な雰囲気を、淡々と―といいたいところだが、実は前にものべたような凝りに凝った文体で書いてゆくのである。（中略）彼は人生の体験を、夥しいほとんどわれわれをよせつけないほどの文学的な教養でもって屈折の多いもの、多彩なもの、陰鬱多いものにしあげている。」[7)] と述べているのは、傾聴に値する。

山内義雄（1905年～1965年）訳『エリア随筆抄』（大人の本棚、みすず書房2002年3月）。この版には、『陽気なクラウン・オフィス・ロウ』（文藝春秋、1984年）の著者、庄野潤三氏があとがきに「ラムとのつきあい」を書いている。角川文庫『エリア随筆抄』（1953年６月）を底本にしている。エリア随筆から16編を選んで訳出している。「あとがき」には、「私が、

ここに、彼の随筆中から珠玉中の珠玉ともいうべき十六編をえらんで訳出し、できるだけ詳しい註釈のほかに、各編に解説を附したのは、「エリア随筆は、どうも分からない」という人たちへの、いくぶんなりとも道しるべの役にたちたかったからである。」[8)] と訳した動機を述べている。

藤井一五朗訳註『エリア随筆集』研究社新訳註叢書29（昭和28年11月初版、昭和36年７月九版発行）英文に対応する日本語訳が載っている。10作品掲載されている。「はしがき」で、藤井氏は「Lambの文章は余りに功緻で底光りするような微妙な複雑な色彩と音と、深い教養の表われとの、しかも調和した、カクテルのようなものであるから、到底私如きものには、その文学的価値を失わずに日本語に移植することなど思いも寄らぬことである。」[9)] と述べ、「解説」では、「Lambは人間の内面的な心理的な動きを重視していることと、悲劇的要素と喜劇的要素が相互に引き立て合って'motley beauty'をなすことを強く感じていることがわかる。（中略）真の人生には純然たる悲劇とか純然たる喜劇とかいうものはない、そこには軽い、面白い、おかしいものと、深刻に悲しいものとの入り混じった'motley spectacle'があるのみである。（中略）その大部分は、humorousな態度で面白く読者を楽しませるが、その陰に人生の悲しい現実を暗示するものであった。」[10)] と蘊蓄のあることを語っている。

三宅川　正（1913年～2011年）訳『チャールズ・ラムの手紙』―「エリア随筆」への萌芽－（英宝社、2003年4月）は、ラムの多くの文学者や親しい友人に出した手紙の内、50通を翻訳した極めて貴重なものである。三宅川氏は、「訳者あとがき」の中で、「はじめ、どのような文体にしたものか考えたのであるが、結局、訳者自身が仮に知人・友人に手紙を出すとした場合の書き方で訳していく外ないと考え、そのつもりで訳すこととした。しかし、訳し終えて読み返してみると、やはり用語も古くさく、文体も回りくどいものとなっていたが、これは所詮ラムの手紙自体の（そしてエッセイと同様の）文体に引きずられたものとして、読者諸氏のご容赦を願いたく、また、ラムがこれらの手紙を書いたのが、主として1800年頃から1830年頃という、十九世紀初頭のいわゆる英国ロマン派復興期（日本で言えば江戸時代の半ばを過ぎて丁度滝沢馬琴、小林一茶、本居宣長等の生きた時代）であったことも併せて考えていただいて、お恕し願う外ありません。」[11)] と訳す苦労を述べている。

黒沢　茂訳註　大修館英文訳註叢書･ドルフィン･ブックス11『レスター先生の学校』（昭和32年７月）対訳形式で、英語学習者のために英語の練習問題が６か所、付録としてついている。

（Ⅲ）「註釈」「評論」

平田喜一（禿木）解説註釈　研究社小英文学叢書40 『ラム　エリア随筆選』（昭和３年11月初版、昭和45年12月第52版）エリア随筆集から６編、続エリア随筆集から２編を収録している。全国の大学の英文科で使われたテキストである。そのIntroductionで、禿木は「一見何等の規矩準縄とてなく、漫然と手紙でも書くやうに書きなされてゐのが彼のessayであるが、その無秩序のうちに秩序があり、音楽的ともいふべき微妙な調子があつて、渾然壁の如き藝術的完美を成してゐるのである。」[12] とラムのエッセイの特徴を上手く説明している。

岩波講座　世界文學（第四回配本）平田禿木 『エッセイ』岩波書店（昭和８年３月）目次八　チャアルズ・ラム　p.23~p.28

岩波講座　世界講座（第七回配本）福原麟太郎 『英文学における風刺とヒウモア』岩波書店（昭和8年6月）目次Ⅵ　十七八世紀のヒウモア―ラム　p.18~p.21

英語英文學講座 （第二回配本）平田禿木 『エリア随筆集』新英米文學社内英語英文學講座刊行會（昭和8年6月）p.1~p.21

研究社　英米文學評傳叢書　35『LAMB』平田禿木（昭和13年12月）戦前・戦後のラム研究の定評のあるものである。本当によく調べ、詳細にわたる伝記と作品の説明、解説は、良くできている。長い間、これを陵駕するものは出ていない。秋骨訳と禿木訳の『エリア随筆集』上下巻に、この評伝叢書があれば、ラムの研究が始められたものである。福原麟太郎氏のラム伝と双璧を成す。

研究社英米文學語學講座　福原麟太郎 『英國随筆史』（昭和15年10月）目次Ⅶ．でCHRALES LAMB　&Co.を扱っているが、目次Ⅰ．の「随筆文學の意味」が重要である。

研究社英米文學語學講座　平田禿木 『傳記･書簡及日記文學』（昭和16年12月）このジャンルを網羅的に扱っているのは、珍しい。47頁でラムの手紙について述べている。

福田　昴　A Study of Charles Lamb’s Essays of Elia（英文）北星堂書店（昭和39年7月）Prefaceの中で、「東洋人の視点を持つ東洋人のエリア信奉者（Elian）によるラムの研究

を目指す。」[13] と書いている。

橋　泰来 『ラムの思考様式』神戸商科大学学術研究会 （1963年10月）

橋氏は、「序論」で、「（ラムの）悲劇的生涯という先入観から、（中略）ロマンチシズムの病弊に、いささか毒されていることは争えない。Elwinにいわすと、E.V.Lucasもまたその流れを汲んで、ラムの英雄性をさらにつよく潤色したものである。かくてエリアの著者はとめどなく感傷化されて、酔狂ともいうべきわざまでが、意図の勝れているゆえをもって、許容されよとする。（中略）しかし彼の精神発展の過程を、評論、随筆、書簡によって辿るとき、単なる'duality of mind'が気まぐれの織りなした綾とみえた裏から、むしろdynamicなtripod-patternが、整然と鮮やかに浮きあがってくるのである。」14）と重要なことを言っている。

福原麟太郎（1894年～1981年）『チャールズ・ラム伝』垂水書房 （1963年）読売文学賞受賞作品。このラム伝は、非常に面白い。まるで福原氏が見てきたような嘘を言いの如く、ラムの人生を語り、ラムの実像をみごとに浮彫している。読者は、自然にその雰囲気の中に引きこまれてゆく。あっという間に読んでしまう。ラムという人間を身近に感じさせてくれる。日本のラム研究にとって、このラム伝は大きな貢献をしたと思われる。

エドモンド・ブランデン（1894年～1974年）著、山内久明訳『チャールズ・ラム』研究社（1972年）ブランデン氏は、日本とはとても縁の深い人で、1924年に来日し、東大で3年間教えている。ラムの後輩でChrist's Hospitalというパブリック・スクール出身であった。

庄野順三『陽気なクラウン・オフィス・ロウ』文藝春秋（1984年）

岡倉　由三郎（1868年～1936年）兄は有名な岡倉天心である。市川三喜（1886年～1970年）とともに研究社「英文学叢書」の主幹になる。岡倉氏は、誰もが認める英語の達人である。この叢書のThe Essays of Eliaの註釈を手掛けている。辞典を数多く、編纂する。独立したラムの翻訳はないが、「英語青年」に何編か翻訳を掲載している。

Ⅳ「まとめ」

このようにチャールズ・ラムを研究した日本人の跡をたどると、平田禿木、戸川秋骨、福原麟太郎、平井正穂の４氏の存在が大きいことが改めて再認識できる。石田憲治氏、山内義雄氏の訳も捨てがたい。それ以外にも素晴らしい業績を残した研究者は多くいる。こ

うした人々のおかげで、後世の我々は、研究ができると思う。公になっていない研究もある。今回雑誌、大学の紀要等は、特に扱うことをしなかった。これまで集めた単行本を中心に検討してみた。

翻訳や註釈は、評論（批評）と比べて少し軽く見られる傾向があるが、原作を日本語に訳すことは、本当に困難な作業である。翻訳も一つの立派な作品解釈であると思う。それゆえ評論の業績に劣ることはない。原作を理解するには、その作品が書かれた言語がわかれば、それが一番良い。でもなかなかそうはいかないのが常である。原作を理解する手がかりとなる上で、翻訳の価値がある。翻訳は、非常にハイブラウな作業である。昨年から刊行が始まった国書刊行会の『完訳エリア随筆』（全4冊）は、平田禿木訳、戸川秋骨訳に並ぶべきものである。藤巻　明氏の註釈も細かい点まで配慮されていて、素晴らしい。現代の口語訳で読める点が、この平成時代の読者にとって一番うれしいことだと思われる。

注

1）完訳エリア随筆Ⅰ正編（上）p.338
2）新潮モダン・クラッシック『失われた時を求めて』全一冊p.519
3）平田禿木訳『エリア随筆集』pp.2~5
4）岩波文庫　戸川秋骨訳『エリア随筆』p.3
5）Ibid., pp.5~6
6）石田憲治訳『続エリア随筆集』pp.280~282
7）筑摩書房世界人生論全集６ pp.417~420
8）山内義雄訳『エリア随筆抄』p.189
9）藤井一五朗訳註『エリア随筆集』p. iii
10）Ibid., p.200
11）三宅川　正訳『チャールズ・ラムの手紙』p.296
12）平田喜一解説註釈『ラム　エリア随筆選』p. iii
13）原文の英文"my ambitious attempt, a study of Charles Lamb viewed by an Eastern Elian with the Eastern eye, has attained its object or not."
14）橋　泰来 『ラムの思考様式』pp.1~5